

公共政策大学院での学生生活を振り返って

京都大学公共政策大学院十六期生 大田航平

この文章を書くには自分はまだ何かやり残しているというのが今この瞬間の正直な感想である。しかし、京都の木々も色づき、道々を歩けば風に落葉が舞うこの季節は、今までの1年半と少しを振り返るにはいい時期とも言えるだろう。鴨川の河原の道を目的もなくうろつけるのももうあと数ヶ月と思うと感慨深い、歩きながらふとそう思う。それにしても、この2年弱を総括するとすればどのようなすれば良いだろうか。

振り返ると、「自分の弱さと向き合う」、というのが入学当初のテーマであった。そのため、今まで学んでこなかった経済学や統計学、今まで取り組んでこなかった

種類の活動に参加した。さらに、就職活動というのが特に苦手で、学部時代はそこから逃げていた感もあり、積極的に取り組むようにした。そういった中で、色々と物の見方が変わり始め、弱さも克服されていったと思った。就職先も決まり、世の中のために活躍する準備も整ったかのように感じた。大学院で学んだことやそこから得られた成長に関して言えば、まずまずといったところだろう。

この文章のテーマ上、特に自分にとって勉強になった授業や活動をいくつかあげてみる。この大学院で最も興味深かったのは、最新の実践的課題に関する授業である。国際経済や、政策評価に関する授

業、様々な実務家の先生の授業などは大変刺激的であったし、その中での議論の機会も多く、様々な視点から考えることができた。また、自主活動に関しても、数多くの議論を重ねたことや外部の人との交流を持ったことなど、大変貴重な経験となった。さらに、色々なバックグラウンドを持つ友人ができたのも非常にありがたかった。

以前は同じ学部の人としか関わりがなかったが、公共政策大学院では、様々な学部や様々な地方の大学や社会人出身の学生が集まっており、このことも視野を広げるために恵まれた環境であったと思う。さらに、個人的には、みんなで集まってスポーツをしたり、サウナ

に行ったりしたのも良い思い出になった。この機会に先生方や先輩方、同期や後輩への感謝の気持ちを示しておきたい。本当にありがとうございました。

ただ、個人的な問題として、苦手な活動も含め色々と動き回中で、成長した面もあった一方、上手いかなかったこともある。単純に言えば、深く考える時間を犠牲にしてしまってきたということである。コロナ禍で閉じこもっている時間は、生産的とは言えなかったが、人生の中でも深く思索を巡らせることができる時間であった。一方で、現在は様々な日常の活動を行き来し、あまり深く考えることのないまま動き回っている。

「小人閑居して不善をなす」^①とも言うが、今は立ち止まって考える時間を前ほど大切にできていないように感じている。

きっと、この傾向は社会人になればもつと強まってしまうのである。こうした事実在最近になつてようやく思い当たったのである。「自分の弱さと向き合うこと」、から始めた大学院での学生生活は同期や先輩、後輩との関わりなど様々な人々との交流の中で、いつしか「自分の弱さを偽ること」に変わっていつてしまったのではないか。そんな気がしてくるし、このままでは見かけ倒しの人間になつてしまふのではないかという恐れすらある。

ただ、最近気づいたのはこうした問題を抱えているのは自分だけではないということだ。社会がきつと多くの人にそうさせている。様々な答えのない問題について、答え

のないのをいいことに多くの人がわかったふりをして不愉快な現実から目を背けている。もしかしたら、自分にとって本大学院での最大の気づきはこの点かもしれない。世の中の事象は全てが相互に作用しその関係性は非常に複雑である。特定の分野だけに注力して得られるものもちろんあると思うが、そのままでは人間のバラバラの取り組みは効果を発揮しきれずに終わってしまう。多くのことを関連づけて紐解く必要性がある。それは「集合知」というものであるかもしれないが、単に物事を集合させるだけではゴールは見えない。スタート地点を見極める必要がある。

ここで私が重要であると考えるのは、心である。現在AI等の発展により自然科学においても認識論が注目されているようだが、結局あらゆる事象は心に映し出され

ているのではないかということである。そこでさらに重要となるのは、人間の苦しみというものの大きさである。人間一人一人にとって最も重要なのは、自らの幸福であらうが、幸福というのはあまりにも掴みどころのない概念である。苦しみに関して、感じ方は人によつて異なるかもしれないが、多くの人が共通の苦しみを共有しており、人々が今この瞬間において常に向き合っている問題である。国際的に見れば、衣食住にあまり困らないとされる、先進国における現代生活の中にはあらゆる苦しみの源泉がある。他人との優劣の比較、経済的な制約、コロナで注目されるようになった孤独、その他人間関係のストレスなど挙げればキリがないだろう。衣食住に困る人よりも多い国では尚更苦しみは大きいだろう。このため、心をスタートポイントとすれば、そして単な

る二ヒリズムに陥らず、他者の苦しみも考慮するのであれば、優しさや思いやりこそが最も重要であることがわかる。しかし、こういった議論は次のような理由からあまり盛んになってはいない。

一つ目は、さまざまな物事について専門分化が進み、本当の問題の所在がわかりにくくなっていることであらう。そういった意味でも、本大学院で実践的な問題について学ぶことの重要性というのは、見かけよりもはるかに大きいかもしれない。本当に善い生き方を社会全体として実現するのであれば、究極的には、人間の認識の問題や自然法則、科学技術の問題、人間の活動の傾向やルールの問題や倫理の問題などを統合しなければならぬだろう。

二つ目は、人間の幸福というものがあまりにも定義しづらいものであることだろう。このために、

(1) つまらない人物は、暇ができると悪いことをしがちである、ということ。

(『礼記―大学』より)

多くの社会や正義に関する議論が方向性を失っていると思う。幸福ということ言葉はあまりにも色々な価値を包含しすぎている。幸福という曖昧な言葉でそれを分解した先にある快樂というものの性質を見落としているのである。快樂は儂い。それはこの世の中自体が儂い性質のものであることにも起因するし、生物の生存本能にも起因するだろう。したがって、大切なのは曖昧な幸福の追求ではなく、苦しみをコントロールしていくことではないだろうか。

三つ目は、国際社会が未だあまりにも不安定なシステムであることであろう。人類はパワーを追求した末に遂には自らを完全に滅ぼす手段を得てしまった。その手段が国際社会をある程度安定させているという皮肉はあるが、いずれにせよ、本質的に人類全体が大きなりスクを背負っている点に変わりはない。国家を主体とし、不安定な現在の国際システムにおいて

は、本当の意味で、人間の善い生き方、徳について人々が思索を深めるために避ける時間はあまりにも少ない。国際情勢、軍事、政治経済は国家を通じて分かち難く結びついており、他の国の発展をわき目に一国だけ桃源郷を作って満足してははその国は生き残ることはできないだろう。

では、何をなすべきか。優しさや思いやりを持って苦しみをコントロールすると言ったところで、なすべきことははっきりしない。

ここで、確実に言えるのは、不愉快な現実には正面から向き合う覚悟が必要であるということだ。今の私は、軽薄な人間であり、社会に提供できる価値をあまり持ち合わせていない。これは私個人にとつてかなり不愉快な現実である。正面から向き合わなければならない問題だ。国際社会においては、現在、大きな地殻変動が生じており、少子高齢化著しい日本は衰退し、飲み込まれてしまうかもしれない。

これは私だけでなく、多くの日本人にとつて、より厳しく不愉快な現実である。

では、この問題から逃げてはいけないかというと、そんなことはない。それも一つの立派な選択肢であろう。国家というものは究極的には間主観的な存在にすぎない。

「国破れて山河あり」とは有名な言葉である。しかし、そこで生じる苦しみはどうか、国が破れる過程においてどんな犠牲を伴うのか、それは私のような人間には想像を絶する問題である。世界中で多くの国がそうした事態を避けるためにあらゆる手を尽くすであろう。そうであるならば、私はこの日本において踏みとどまってみたいというのが率直な今の感想である。

ただ、多くの人が同じような気持ちを抱いたところで、過去の悲惨な歴史を繰り返すだけかもしれない。きっと、今も昔も多くの若者が同じような気持ちを抱いて共に団体に身を捧げたことであろう。

しかし、それでは問題の根本的な解決にはならない。では、この不愉快な現実を直視し、どこに向かえばよいのか、答えは私にはわからないのである。自分は自分の出身地の歴史から、平和を志して進路を考えてきたが、学びを深めようとするほど、答えがわからなくなるのである。国際関係論でいうカント的な平和の思想はきっと一つの答えであろう。しかし、それだけで現実を改善することはできない。先進諸国の発展の歴史はあまりにも不愉快な現実のつきまとうものであるし、結局国とはそのようなものなのだろう。

どうすればよいのか。やはり、ありとあらゆる不愉快な現実を真っ直ぐ受け止めるというのが一つの究極の答えだろう。全てを受け入れる覚悟が本当にできればそこに苦しみはない。だが、多くの人は悟りには至れないというのをもまた、不愉快ではあるが現実である。また、多くの人間が複雑に相互に関

係して生きている時代において他人を顧みず、自分の「幸福」のためだけに生きるわけにもいかならないと思うのである。

今私にできることは何か。わからない。ただ、不思議と、巨大な不愉快な現実の中に飛び込んでいこうとしている。逃げるわけにはいかないという気持ちがある。ただ、この気持ちも、本当は自分の弱さを偽ろうという隠れた動機から来ているのかもしれない。そんな気もする。

不愉快な現実と対峙し、自分の弱さと向き合う。これからの私の目標である。軽薄な自分にとってこれはあまりにも大きすぎる課題かもしれない。だが、わかっている課題を放置するわけにもいかな

いのである。本当の優しさや思いやりは自分の弱さと向き合うことでは、生まれてこないと思う。現代の生活では、あまりにもそのことに気が付ける機会が少ない。

就職活動の「自己分析」ではないが、もつと自分と向き合う時間が必要である。自分と向き合っている、エゴから抜け出し、優しさと思いやりを深めることができる。世間ではあまりにも自分の外に答えを求めすぎている。本当の答えは自分の中にしかないはずである。もちろん、他人と向き合うことも重要である。本当に一人で生きてきた人間などいない。全ては相互に関連している。他人に優しさと思いやりを向けることで、エゴから抜け出すことができる。

残念なのは、こうした考えが自分の中で一定の段階で足踏みしていることである。公共政策大学院での学びが本当にそこに結びついたときこそ、自分が社会に真に貢献できる時であろう。人々が自分と向き合える社会、弱さを超え、苦しみを超えていける社会、そのための礎を築きたい。

いつの間にか季節は巡り、京都で大学院生として二度目の冬を迎えようとしている。秋になつてずいぶん冷え込んできたが、京都は空が広くてきれいだな、と時々歩きながら思う。それにしても、正直、手際がよくない自分にとって2年は十分な時間ではなかったかもしれない。しかしながら、私はもう次に進まなければならない。

結局、このまま、悩みを抱えたまま学生として動き回っていても得られるものは多くはなかったであろう。現実と向き合うために前に進むというのが、暫定的な結論である。

——ミネルヴァの梟は迫り来る夕闇とともに飛び始める。^②——とするならば、人は永遠に真理に迫り着けない運命なのかもしれない。しかし、人の心の中にこそ答えがあるとすれば、永遠に捉えることのできない幻を追い求めるよりも、河原にそよぐ風の中に、踏みしめる足の感触の中に、真理を見出したいと願う。

(2) ヘーゲルが『法哲学』で記した言葉による。ミネルヴァというローマ神話の知恵と芸術の守護神（ギリシャ神話だとアテナに相当）に仕える梟は一つの時代が終焉を迎え、古い知恵が夕闇に沈むと新しい知恵を開くために飛び始めるということを意味する。ここでは「知恵には終わりが無い」というようなニュアンスで用いられている。



大田 航平
おおた こうへい

広島県出身。
京大法学部時代は国際法学研究会で、国際法模擬裁判に励んだ。
京大公共政策大学院進学後はインゼミ実行委員会にて、
昨年度は外交安保分科会に所属し、本年度は広報を担当した。
趣味は合気道、瞑想、登山。